

乳腺 micropapillary variant of pure mucinous carcinoma の一例

特定・特別医療法人慈泉会相澤病院 臨床検査センター 検査科¹⁾,
同 病理科²⁾

○^{ふじわらまさと}藤原正人(CT)¹⁾, 中野 聡(CT)¹⁾, 石橋恵津子(CT)¹⁾, 野崎智恵(CT)¹⁾,
小林沙織(CT)¹⁾, 伊丹川裕子(CT)¹⁾, 樋口佳代子(MD)²⁾

【症例】37歳女性。乳房検診の超音波検査にて、左C領域に、 $1.35 \times 1.1 \times 0.7\text{cm}$ の低エコー腫瘤を認め、穿刺吸引細胞診を施行。細胞診にて、pure mucinous carcinoma と診断し、左乳房温存手術が施行された。

【細胞所見】背景に粘液が見られる中に、結合性の強い大小様々な乳頭状集塊が出現していた。個々の細胞は、核の腫大や核形不整を伴い、核小体を有する細胞が多く見られた。また、核分裂像も少数みられた。

【肉眼像及び病理組織学的所見】左C領域に径 $2.2 \times 1.0\text{cm}$ の粘液成分に富む腫瘤を認めた。組織像では粘液の中に浮遊して増生する乳頭状の集塊を認め、一部では、micropapillary pattern が目立った。また周囲のリンパ管には、micropapillary pattern での侵襲が高度であったが、リンパ節転移は認められなかった。免疫組織学的に、ER (+)、PgR (+)、Her-2 (Score 0)であった。最終的には、micropapillary variant of pure mucinous carcinoma ,pStage II A と診断された。

【まとめ】Pure mucinous carcinoma は、一般的に比較的予後良好とされているが、micropapillary pattern と高度のリンパ管侵襲を示す亜型が近年報告されている。また pure mucinous carcinoma の細胞像は、一般的に細胞異型に乏しいが、本症例では、異型の強い細胞が小～中乳頭状集塊で多数認められ、核分裂像も認めた。乳腺の粘液癌の診断の際には、このような亜型の存在を念頭に置き、細胞像を観察する必要があると考えられる。